異性の友人同士の会話における遊びとしての対立

ー疑似インポライトネスの観点からー

佐藤亜美(名古屋商科大学)

1. はじめに

本発表では,異性友人間の日本語会話における「遊びとしての対立」(大津 2004)を,「疑似インポライトネス(mock impoliteness)」(Haugh & Bousfield, 2012)の観点から分析して報告する. 大津(2004)は,遊びとしての対立を次のように定義している.

「本来は『対立する関係』で行われるはずの発話や行為が遊びで行われる, つまり否定されることによって逆に『親しい関係』が導かれる.このようなごっことしてフレーム付けされた対立を『遊びとしての対立』と呼ぶ.」(大津 2004, p.46). 具体的には (1)のようなやり取りを指す.

(1) 412-26-JM124-JF227[1] (抜粋)

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発　話　内　容
312	292	*	JF227	最近は、結構節約をねー、心掛けってー、月に1万しか飲みに行けないってゆー‘いう’。
313	293	*	JM124	《少し間》1万ありゃー‘あれば’十分やろ、はっはっはっは<2人で笑い>。
314	294	*	JM124	1万ありゃー‘あれば’じゅうぶ<ん‘十分’やろー>{<}。
315	295	*	JF227	<いやいや>{>}いやいやいやいやいや。

この会話では, JF227の発言「最近は, 結構節約をねー, 心掛けってー, 月に1万しか飲みに行けないってゆー」(ライン番号312)に対し,友人のJM124が「1万ありゃー十分やろ」(ライン番号313)と相手の努力を過小評価するようなコメントで返答している.言葉通りに受け取れば,JM124 の否定的なコメントは,JF227 のフェイスを侵害する発話行為(Face Threatening Act,以下FTA)となり得るが, 実際にはこの発言の直後に2人で笑っていることから(ライン番号313), 冗談として解釈されていることが分かる.

日本語会話で観察される(1)のような遊びとしての対立は、これまでポジティブ・ポライトネス(Brown & Levinson, 1987)(以下 B&L)のストラテジーとして調査されてきた(大津 2004; 大塚 2009; 今田 2015; 張 2017など). しかし, 言語形式と実際の機能の不一致に注目すると, 張(2017:103)が指摘するように,見せかけのインポライトネスあるいは疑似インポライトネスとしても捉えることができる.そこで本発表では,これまであまり検討されていない疑似インポライトネスの観点から, 遊びとしての対立を調査する.

2. 先行研究

先行研究では,対立行動がなぜ冗談として成立するのかを,「フレーム」(Bateson,1972)の形成に着目して会話分析することで明らかにしてきた(大津 2004; 大塚 2009;今田 2015; 張 2017).同現象が遊びとして成立するのは,会話参与者が言語・非言語的な文脈化の合図 (contextualization cues)(Gumperz,1982)を通じて, 進行中の会話が「遊び」であることを認識するフレームを協働形成しているからである.また,上記に挙げた先行研究において, 遊びとしての対立の開始パター

[1] (1)の会話例は, 本調査の分析で使用した『BTSJ 日本語自然会話コーパス (トランスクリプト・音声) 2021年3月版』(宇佐美, 2021)からの抜粋である. また, 話者記号JF227のJFはJapanese Female、JM124のJMはJapanese Maleの略である.

ン,遊びのフレーム形成で使用される文脈化の合図の特徴, 遊びとしての対立のパターンが提示されてきた.

しかし,遊びとして表明された対立が成立しないケースについては,十分に議論されているとは言い難い.この点に関連して, 大塚(2009:137)は,「(前略)親密な関係にあっても当然フレームを共有できない場合もあり、またその結果対立的発話はFTAとなりうる」と述べており, 話し手が意図しない対立の例を挙げて示している.遊びのフレームが共有されない,あるいは遊びとしての対立が成立しないケースについて検討することは, 同現象をより深く理解するために重要であると言えるが,発表者が調べた限り, そのような後続研究の報告は見られない.これは, 同現象をB&L(1987)のポライトネス理論の枠組みで調査していることに起因すると考える. 遊びとしての対立が,必ずしもポジティブ・ポライトネスのストラテジーとして機能するのではなく,FTAあるいはインポライトネスとして解釈される可能性を考慮した分析視点が必要だと考える.

3. 調査方法

以上を踏まえて本調査では, Haugh & Bousfield(2012)による「疑似インポライトネス(mock impoliteness)」の観点から,遊びとしての対立を分析した. Haugh and Bousfield(2012)は,疑似インポライトネスを次のように説明している.

"… mock impoliteness in interaction involves evaluations of talk or conduct that are potentially open to evaluation as impolite by at least one of the participants in an interaction, and/or as non-impolite by at least two participants." (Haugh & Bousfield 2012:1103).

Haugh & Bousfield(2012)は,疑似インポライトネスがインポライトネスとして受け取られる可能性を指摘しており, そのような発話が相互行為の中では参与者にどのように評価されているかを,会話分析の手法によって冗談のフレームが形成されていることを示し論じた.これは, 遊びとしての対立の研究で用いられている分析方法と同じである. 本調査でもHaugh & Bousfield (2012)のアプローチを採用し, 大津(2004)が示した遊びの合図 (大げさな感情表現 (発話の繰り返し,韻律の操作, 感動詞の使用), 話し方を一時的に変えるスタイル・スイッチ,笑いなどの非言語による合図)を手がかりに,下記の対象データで観察された遊びとしての対立を分析した.また,遊びとしての対立が成立しているかの判断は,聞き手が対立表明の発言を遊び(冗談)として承認していることを示しているかを基準とした(例: 笑い、発言を楽しんでいることがわかるコメント, 深刻に受け取っていない, など).

対象データは,『BTSJ日本語自然会話コーパス (トランスクリプト・音声) 2021年3月版』(宇佐美,2021)に収録されている日本語母語話者の異性の友人2者間による対面の自然会話 (音声データ) 18組である[2]. 会話の参与者は 18歳から26歳の大学生または大学院生で, 1組の会話時間は約15〜20分, 合計約5時間18分の会話を対象とした.

4. 結果

18組のうち15組で, 遊びとしての対立のやり取りが観察された(1組につき, 1〜11件観察された). 会話参与者を日本語母語話者に限定すると, 先行研究では, 同性の友人同士の会話対象に調査されてきたが(大津 2004;大塚 2009; 張 2017), 本調査により, 異性の友人同士の会話でも遊びとしての対立が成立することが分かった[3]. また先行研究が示したように(大塚 2009; 張 2017), 一方が相手をからかうパターンと, 冗談で言い争うパターンの両方が本調査でも観察された.

冒頭で言及した(1)のように,相手との親密さを高めるポジティブ・ポライトネスとして機能していることが言語データか

[2] 会話例の記述は, 宇佐美 (2021)のBTSJ日本語自然会話コーパスのトランスクリプトを抜粋してそのまま記載している.トランスクリプトで使用されている記号は, 宇佐美まゆみ(2019)「改訂版:基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2019年度版」に基づいている.本稿の(1)と(2)の例で使用されている記号は, 以下の通り.

‘ ’	通常とは異なる発音がされた場合, ‘ ’中に正式な表記を記載	[↑][→][↓]	特記すべきイントネーション
、(読点)	発話中の短い間	< >	発話の重複は双方の発話を< >でくくり,重ねられた発話の最後に{<}を, 重ねた方の発話の最後に{>}を記載
《沈黙X秒》	1秒以上の間.沈黙としてその秒数を記載 例) 《沈黙5秒》	<笑いながら> <2人で笑い>	笑いながらの発話や笑いは,< >の中に説明を記載.

[3] 今田(2015)の調査では, 異性の友人同士の遊びとしての対立が分析されているが,日本語母語話者と非母語話者の参加者による日本語会話を対象にしている.

ら判断できる例と，参与者間で遊びのフレームが共有されていると判断できるが，ポジティブ・ポライトネスとして機能しているかは判断が難しい例が見られた．以下では，後者の例として(2)のやり取りを検討する．議論の焦点となる発話は編みかけ　をして強調している．

(2)は，JM114(日本語母語話者，男性)とJF214(日本語母語話者，女性)が，大学の春休み期間が長いことについて話した後(ライン番号135-143)に続く会話である．ライン番号144以前の会話では，2人は春休み期間の長さについてそれぞれ軽く笑いながらコメントし，相手への共感を示す返答をした．ライン番号114でJM114が話題転換し，今年の春休みは遊ぶことを述べた．

(2) 397-26-JM114-JF214 (抜粋)

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発　話　内　容
144	136	*	JM114	えー、今年は遊ぶ。
145	137	*	JF214	《少し間》遊ぶの?。
146	138	*	JM114	遊ぶでしょ。
147	139	*	JF214	えー[↑]、だってもう勉強できる期間そこしかないじゃん。
148	140	*	JM114	え[↑]、遊ぶ期間<軽く笑いながら>そこしかないじゃん。
149	141	*	JF214	えー[↑]、ふふっ<軽い笑い>、お金できたら遊べるじゃん。
150	142	*	JM114	遊べないよ、時間ないもん。
151	143	*	JF214	《沈黙2秒》そーお[↑]。
152	144	*	JF214	そうか。
153	145	*	JM114	《沈黙1秒》遊ぼうよ、ふふふ<軽い笑い>。
154	146	*	JF214	でもね、お金あったら海外とかね、ちょっと行きたいけどね、最後。
155	147	*	JF214	いや、でも海外行くんだー、仕事で<笑い>。

この会話における最初の対立表明は，JF214の「遊ぶの?」(ライン番号145)である．少し間があったことや声のトーンからJF214のJM114の発言に対する驚きが表現されており，同時に，JF214がJM114の「今年は遊ぶ。」(ライン番号136)という考えに対して賛同しない立場を示していることが分かる．JF214の問いに対して，JM114が「遊ぶでしょ。」(ライン番号138)と再び自分の立場を表明することで，両者の間に一時的に対立関係が築かれている．

しかし，ライン番号147-149では「対立」から「遊びとしての対立．」に移行していることがわかる．「えー」という大げさな感情表現や，上がり調子のイントネーション，相手の発言を真似するスタイル・スイッチ，笑いといった「遊び」のフレームであることを示す合図(大津，2004)が使用されている．ライン番号147-149のやり取りに注目すると，両者とも遊びとしての対立を楽しんでいることがわかり，ポジティブ・ポライトネスとして捉えることが可能である．

だが，ライン番号150においてJM114が「遊べないよ，時間ないもん」と主張した発言には，遊びであることの合図が観察されず，再び，ライン番号144-146で形成された対立関係に戻っている．これに対してJF214は，ライン番号114の発話の時よりも長い間(沈黙)の後，JM114と対立する発言ではなく，「そーお[↑]」(ライン番号151)「そうか．」(ライン番号152)と，相手に賛同する姿勢を見せて，対立関係を終わらせている．その後，JM114が春休みは遊ぼうと話題を続けるが(ライン番号153)，ライン番号155でJF214は話題転換している．

このように，(2)の例では，対立を表明したJF214が相手への同意を表明するフェイス補償を行い，話題を転換してその後の会話を続けるというポライトネスを維持するストラテジーが観察された．談話における一連のやり取りの中で遊びとしての対立の機能を検討すると，ポジティブ・ポライトネスであると言い切ることは難しく，むしろ，対立関係によるFTAを緩和するストラテジーとして理解することも可能である．

5. まとめと今後

本発表では，遊びとしての対立を「疑似インポライトネス」(Haugh & Bousfield, 2012)の観点から分析することで，ポジティブ・ポライトネスとは判断しきれない例を検討した．(2)以外にも，ポジティブ・ポライトネスとは言い切り難い例

があり， しかし， 聞き手にポライトネスまたはインポライトネスとして受け取られているかまでは， 音声データからは判断できなかった． 今後の調査では，上記に挙げた課題を探求するため， 映像データにより表情などの文脈化の合図を含めた分析や，フォローアップインタビューによる参与者の視点を含めた分析をする予定である．

参考文献

Bateson, Gregory. (1972) A theory of play and fantasy. In Gregory Bateson. Steps to an Ecology of Mind (pp.177--193). Chicago and London: University of Chicago Press.

Brown, Penelope, & Levinson, Stephen C. (1987). Politeness: Some universals i n language usage. Cambridge: Cambridge University Press.

Gumperz, John J.(1982). *Discourse strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.

Haugh, Michael, & Bousfield, Derek. (2012). Mock impoliteness, jocular mocke ry and jocular abuse in Australian and British English. Journal of pragmatics 44(9), 1099-1114.

今田恵美.(2015).対人関係構築プロセスの会話分析. 大阪大学出版会

大津友美.(2004).親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ポライトネス: 遊びとしての対立行動に注目して. 社会言語科学, 6(2), 44-53.

大塚生子.(2009).大阪在住女子高校生の「対立ごっこ」におけるポライトネス:「遊び」を伝える文脈化の手がかりを中 心に. 大阪大学言語文化学, 18, 127-139.

張允娥.(2017).日韓同性間の会話における不同意・否定的評価の相互行為:ジェンダーとポライトネスの観点からみる対 立と冗談. 阪大日本語研究, 29, 101-128.

宇佐美まゆみ監修 (2021).『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリ プト・音声）2021 年 3 月版』,国立国語研究所, 日本語教育研究領域「日本 語学習者のコミュニケーションの多角的解明」,サブ・プロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」(リーダー:宇佐美まゆみ)